

## 第25回いたばし国際絵本翻訳大賞イタリア語部門

### 『Che bello!』講評

控えめな色づかいで描かれた幻想的な森にすむイモムシの、**bello** という言葉の意味を探す旅、いかがでしたか？ ここ何年かの課題は、比較的文章量の少ない、現代的な絵本が続いていたので、いきなり文章量がぐんと増えて、驚かれた方もいたかと思います。とはいえ、伝統的な昔語りの形式を踏襲したストーリー展開になっていますので、おそらく翻訳はしやすかったのではないのでしょうか。

なんといってもいちばん悩むのは、タイトルにも使われている **bello** の訳でしたね。これさえ決まれば、3分の1ができたようなものかもしれません。**bello** という形容詞は、実に多彩な意味合いで頻繁に用いられるので、小説などを訳していても、もっとも訳語に悩む単語の筆頭です。応募された作品のなかでは、「すてき」という訳が圧倒的に多かったようです。次いで、「きれい」「すばらしい」「うつくしい」など。なかには、関西弁を使って「ほんまに、ええかんじ」と訳してくれた方や、JK（女子高生）風に「やば〜い！」と訳してくれた方もいらっしゃいました。これには正解はありません。大切なのは、全文を通して **bello** を同じ訳語で訳すこと。それと、最後のページで、**Che bello!** と言ったあとに、しっかりと余韻が残ること。たとえば、「すてき」と「きれい」が混在している作品もありましたが、統一してあげないと、言葉探しの旅が生きてきません。また、訳語を当てずに、イタリア語の音のまま、「ベッロ」と訳していた方も少なからず見受けられましたが、ここでぴったりの訳語を選ぶことが翻訳者の力量ですから、逃げずにきちんと向き合って、しっかり自分なりの訳を当ててください。

それと、主人公の **bruco**。 **bruco** というイタリア語自体は、ケムシとイモムシのどちらも含まれますが、ここで「ケムシ」と訳してしまうと、絵の、つるんとしたイメージとの違和感がどうしても出てしまいます。絵本の場合、訳語を選ぶうえで、絵に描き込まれている情報をないがしろにははいけません。ほかにも、たとえば 5 ページ目に出てくる **una bestia sconosciuta** が口にする《**Come sei bello**》という台詞ですが、絵をよく見ると、女の子らしき影が描き込まれています。ですので、あまりにも男の子っぽい口調で訳してしまうと違和感が生じますので気をつけてください。16 ページの鹿の台詞にもおなじことが言えます。読者は、角の生えた牡鹿の絵を見ながら読んでいますから、あんまり女性っぽい口調には訳さないほうがいいでしょう。

とはいえ、絵に描かれているからといって、原文に書かれていないことまで訳出する必要はありません。おなじ 5 ページ目の **una bestia sconosciuta** を「女の子」と訳

している方もいましたが、イモムシの目線からすると、あくまでも未知の生物ですから、「みたこともないいきもの」で十分です。同様に、最後のページも「のぼった月を見て」などと、原文にない文章を加える必要はありません。子どもたちは、発見の天才です。絵を見ながら文章に書かれていないことを発見するのは、絵本を読む喜びのひとつですから、それを奪わないようにしましょう。とくに最後のページは、原文にない文章を加えて説明してしまうと、物語の余韻まで損ねることになりかねません。作者が最低限の説明でもって、あえてシンプルな描写を選んだのですから、それを尊重するように。ちなみに、最優秀翻訳大賞の方は、最後の文章をこんなふうに訳してくれました。「『うわあ、す・て・き！』 みんなは、くちぐちに こえをあげたきり、あとは なにも いいませんでした。」

おなじく 5 ページに出てくる **muso** ですが、これは、たとえば猫や犬のように、顔の鼻の部分が突き出した動物の「顔全体」のことを指します。そこから派生して、「不機嫌」といった特定のニュアンスをこめて、人間の顔も指すようになりました。ですので、20 ページのモグラのシーンは、顔全体が描かれていますから、「鼻」よりも「顔」や「頭」のほうがしっくりくると思います。なお、おなじく 20 ページの **face capolino** は、これで「のぞかせる」という意味の成句です。「小さな頭」と訳した方が散見されましたが、辞書は、きちんと成句のところまで目を通すようにしてください。最後の 25 ページの、**col naso al cielo** は、直訳すると、「鼻を空にむけて」ですが、ここも成句として、「あおむけになって」という意味ですので、「鼻」と訳出する必要はありません。

このシーン、「空をみあげるために寝そべった」というよりも、疲れたので、ねそべってみたら空が見えた、という順序になっています。どのような順で文章を訳すかは、頭のなかでシーンを思い描きながらお話を聞いている子どもたちにとってはとても大切なことですので、なるべく順序を逆にしないようにしましょう。

もうひとつ、今回気になったのが、指示詞です。たとえば 21 ページに、モグラの穴が暗いと言っているカラスの台詞がありますが、「こんなに暗い」という訳や、「あんなに暗い」という訳が目立ちました。絵を見て（絵がなくてもわかりますが）、モグラとカラスの位置関係をしっかり把握したら、「そんなに暗い」が適切であることがわかります。

また、毎回のように指摘していることですが、おなじページに、同一の接続詞や、同一の文末が 3 回 4 回も繰り返して使われていたりすると、単調な感じになってしまいますから、避けるようにしてください。今回は、説明的な描写が多かったからか、「なのです」という文末の多用が目立ちました。訳文を音読してみると、そうしたり

ズムなどにも気づけるので、訳しあがったら、必ず声に出して読んでチェックするようにしましょう。

以下に、そのほか気をつけたい箇所をいくつかあげておきます。

・ p. 9 **Questo è bello!** : 「これはステキだ！」という訳でも意味的には間違いではありませんが、**bello** の意味を問われているのですから、「ステキというのはこれのことだ！」といった訳のほうがしっくりくると思います。

・ p. 12 **manco a dirlo** : 「いうまでもなく」。ここでカラスが口出すだろうということは、当然すぎて、あえて言うほどのことでもない、といったニュアンスです。

・ p. 13 **brontolò l'orso riparandosi sotto la chioma di una quercia : ripararsi** は、ここでは、「雨宿り」のことを意味しています。クマは、体が大きすぎてキノコの下では雨がしのげないので、大きなオークの木の下で雨宿りをしているというシチュエーションです。

・ p. 14 **sempre più avvilito** : p. 23 にもまったくおなじ表現が出てきますので、おなじ訳語でそろえてあげると、しだいに元気がなくなっていくイモムシの様子が強調されて効果的です。

・ p. 17 **sdraiato per tutta la lunghezza** : ソファーいっぱいにはシカが体を横たえている感じです。「腰をのばして」「足をのばして」といった訳だと、絵との矛盾が際立ってしまいます。「ソファーいっぱいになぞべて」といった訳がいいと思います。

・ p. 23 **lanciandosi in picchiata** : **picchiata** には、「たたくこと」のほかに、「急降下」という訳語がありますね。**lanciarsi in picchiata** で、「勢いよく急降下する」という意味です。空き缶をたたいたり、つついたりしているわけではありません。

・ p. 23 **la prese ro in giro tutti.** : **la** は、直接目的語で **la cornacchia** を受けていて、**presero** の主語は **loro** ですから、「みんながカラスをからかった」です。「カラスがみんなをからかった」と、逆に解釈している人がいたようです。

・ p. 25 **gli animali, stanchi, si sdraiarono** : **stanchi** は、**animali** を修飾している形容詞です。**Essendo stanchi** と、ジェルンディオが省略されていると考えてください。

「動物たちや、疲労感を暗やみが包みました」、などと **avvolgere** の目的語の名詞句と解釈した訳が目立ちました。正しくは、「つかれた どうぶつたちは、ねころびました」です。

文章が長かったからか、今回とくに、漢字をどの程度使うかに悩まれた方が多かったようです。よく、対象年齢を教えてください、というご質問があるのですが、たとえば「2年生向き」などと決めて、厳密に既習漢字だけ漢字を用いると、とても不自

然な文章になってしまいます。翻訳の文体と、文章量とで、読んでいて心地のよい漢字仮名遣いを模索するのも、またひとつの勉強なので、自分で決めてみてください。成績優秀者の方の作品には、全部平仮名のものもありましたし、漢字をある程度用いられたものもありました。読みやすい文章でありさえすれば、どちらでもいいと思います。

今回のテキストは、あまり奇をてらわず、繰り返しが心地よい昔話のような落ち着いた文体で訳してあげるのがしっくりくるように思いました。イモムシのすんでいる幻想的な森の世界に、読んでいるうちに自然とひきこまれてしまうような、そんな訳にできたらいいですね。

[文中のページ数は、タイトルと著者名の入った扉のページを1ページ目としてカウントしたものです]

イタリア語部門 審査員 関口英子